

令和七年度 学士入学・一般編入学試験問題

神道文化学部

小論文

― 注意事項 ―

- 1 問題は2ページ、解答用紙は1枚である。
- 2 解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
- 3 試験時間は60分である。

11月10日(日)

T14A・T24A・Y14A・Y24A

このページには問題はありません。

問 次の文章を二〇〇字程度で要約したうえで、今後の神道のあるべき姿について、筆者が論じる神道の原点を踏まえつつ、自身の意見を八〇〇字程度で述べなさい。（全体で一〇〇〇字程度）

神社を日本固有の言葉ではヤシロという。ヤシロを漢字にあてると社であるから、社は神社の簡略な表現として用いられる。がんらい神と社を組合わせた熟語は、中国では一般には余り用いられない。それもその筈、社とは土地の神の意、わが国の文献だと祇（く）につかみ）に当ろうか。ところが社は、わが国ではヤシロのほかにモリとも訓まれる。たんに樹木の群生繁茂した所は森であるのに対し、神聖な森が社である。『万葉集』では哭沢の神社、雲梯の神社と神社をモリと訓ませたり、社一字でモリと訓ませたりしている。

モリと訓む社に対し、同様の意味に用いられる杜という字がある。本来、杜の漢字は「とちる」「とぎす」の意で日本人が杜と訓ませている字とは別物であり、それゆえ杜は日本人の発明した文字といってよい。

すなわちヤシロはモリに外ならず、神をまつる聖域で、神が鎮座する仮の屋舎（屋の代）とみるべきものが杜であった。京都下鴨の糺の森を罪惡・禍事を糺明した神裁の場である、いい加減なことを云った学者があつたが、「糺す」は本来タタスであり、神の顕現・降臨ないしは御生れの意味であつて神の憑代としての神木のある杜を意味したのである。

極言すれば全国の杜はすべて糺の森であつた。純然たる国字として、糺が有名だ。その本義は栄木とも境木とも解され、サカキなる特定の種を指すようになったのは後のことである。いつ頃から糺の字が使われ出したのか厳密な考証はしていないが、杜の字にもサカキの訓が与えられていた。

神木とみられるものは、杜の中でもすぐれて大きく高い老樹が選ばれ易く、落雷の目標になった。霹靂の木と称するものは雷神降下の聖樹であつた。九世紀後半、藤原基経が雷公祭を営んだ北野の地にはもと霹靂木があり、北野社創建の遠い歴史的素因となつたのかもしれないが、雷公祭そのものは陰陽道的祭りであつた。

『常陸国風土記』に賀毘礼高峯の立速男命は天より降つて松沢の松の木の上において、人里近くして崇りがしきりであつたので、住民が困り、幣を捧げて高峯にもどつてもらつたとある。速の字から神験が迅速にあらわれる崇厲神、つまり雷神だったのであろう。

古代人は落雷した木を霹靂木と称し、その周辺を聖域とし、そこから山の方へ向かつて雷神（天神）をまつり、あるいはその山腹や山頂に神籬を設けて落雷の祟りを防ごうとした。『日本書紀』に推古二十六年、安芸国で河辺臣が船舶の用材として霹靂木を切るに当たり幣帛を奉り剣を安じて落雷を封じた。そのため雷神は小さい魚になり木の股に挟まったとある話は、大木の股に供物を置き雷神をまつた風習の名残りを

示唆し、大木は雷神をまつる意味からも霹靂木と云われたのであろう。

山腹や山頂には神籬と同様、磐境いわさかと称する巨石に区切られた祭場をつくり、そこがヤシロ（仮の社屋）となったことは、風土記にも神社の遺跡である巨石群の存在を記していることから明らかである。上述の賀毘礼高峯には立速男命の社が、垣根も種々の神宝も石となつて残り、空飛ぶ鳥もその上は避けるとある。石神は各地にまつられ、『出雲国風土記』によると、楯縫郡神名備山かんなびやまの大小多数の石神群は雨乞いに験あり、必ず雨沢があるというのも、この山に霹靂神をまつた大規模な神社の遺跡があったことを物語っている。

九州方面では、神功皇后に結びつけて、石を安産の呪能あるものとする伝承が多くみられるが、『筑前国風土記』逸文といわれるものには、石に落雷して三段に破れたとあり、雷神信仰と生殖・増産・安産の信仰とは本来結びついたものであった。

所詮、落雷現象は神のミアレであり、杜こそはその条件にふさわしく、それがヤシロの原点であったのである。霹靂信仰は仏教にも入り、大和長谷寺の十一面観音は近江国高島郡にあった楠の霹靂の木でつくられ、京都の革堂こうどうの千手観音も賀茂の雷神が降下した槻の霊木を行円上人が彫刻したものという。霊験あらたかな仏像は御生みあれの木から生まれたものであった。

以上がヤシロ、そして神社さらには神道の原点と考えたい。

（村山修一『神道文化の展開』塙書房に基づく）

（注）○幣——神に奉る物の総称。幣帛。